

非定常フラクショナル共和分のハウスマン検定

兵庫県立大学経済学部 山口圭子

本研究では Robinson (2008) で提案されたフラクショナル共和分のハウスマン検定を Abadir et al. (2007) を用いて非定常な場合に拡張した。この検定は事前に d の同一性を確認する必要もなく、共和分ベクトルの推定も必要もないという意味で簡便である。Robinson (2008) でも tapering により非定常な場合を扱っているが、理論的には我々の方法のほうが検出力が高いことが予想され、それをシミュレーション実験により確認した。

また、余裕があれば為替データの分析に適用した例についてもふれたい。